

【0-25】

がんセンター ICTにおける薬剤師の関わり

～チーム内専門職種との連携・協働による抗菌薬適正使用コンサルテーション～

○中晴 徹、岸本 早百合、大前 隆広、多々見 俊輔、遠藤 由里香、逸見 結衣、渡邊 小百合、伊勢原 祐子、菰渕 利香、藤原 正幸、安達 嘉織、小田中 みのり、佐倉 小百合、川高 菜緒、大谷 祐子、見上 千昭、柴田 博子、松本 敏明 (がんセンター 薬剤部)

1 はじめに

当センターはがん専門病院であり、感染症治療対象患者は易感染性で複雑な疾患背景を持つ患者が多い。そのため、抗菌薬処方時に薬剤選択、投与量・投与期間設定等について感染制御チーム (Infection Control Team: 以下、ICT) に相談するケースも多い。平成26年度に抗菌薬化学療法認定薬剤師がICT薬剤師として加入してからは、より専門性を活かしてICT内での他職種との連携を積極的に行い、ICTに寄せられる医師からの抗菌薬についての相談に対応している。本発表では、ICT薬剤師が行っているチーム内専門職種との連携・協働による抗菌薬適正使用コンサルテーションについて報告した。

2 チーム内専門職種との連携・協働

ICT薬剤師は、チーム内各職種と連携しながら、薬剤師の専門的な抗菌薬の知識に各職種の専門知識を足し算することで、よりよい抗菌薬療法を提案するように努めている。

(1) 感染管理認定看護師との連携

感染管理認定看護師はICTの主たる窓口でもあり、医師から抗菌薬について相談をされた症例があれば、認定看護師の視点から患者背景や症例に関する情報を詳しく調査した後にICT薬剤師に情報提供がある。主治医やカルテからはわからない情報も提供してもらえることもあり、適切な抗菌薬療法提案には欠かせない連携である。逆に薬剤師が医師から直接相談を受けた症例については、認定看護師に抗菌薬療法の提案内容を伝えて症例情報を共有する。認定看護師は必要があれば病棟での感染拡大防止対策等の対応を行う。

(2) 医師との連携

インфекションコントロールドクター (Infection control doctor) とは外科的処置の必要性について相談する。画像データをスペシャリストに見てもらうことにより、ドレナージ等の外科的処置の提案もしてもらい、抗菌薬だけでは治療し得ない症例にも対応している。また、疾患や手術についての詳しい情報も教えてもらうことにより、正確な病態や感染部位を把握して適切な抗菌薬提案の参考としている。

(3) 細菌検査技師との連携

細菌検査技師とは培養結果、感受性結果についてのディスカッションを行う。培養途中経過を把握することにより、早期に適切な抗菌薬選択が可能となる。また、珍しい菌種についての情報を提供してもらう場合や、より詳しい情報を得るために検査を追加してもらう場合もある。

3 結果

(1) 抗菌薬コンサルテーション件数

平成26年10月から平成27年6月の期間でICT薬剤師が対応したコンサルテーション件数は42件あった (投与量の問い合わせ等軽微なものは除く)。相談内容は多剤耐性菌 (MRSA、ESBLs、緑膿菌等)、真菌血流感染、術後感染等多岐にわたっていた。

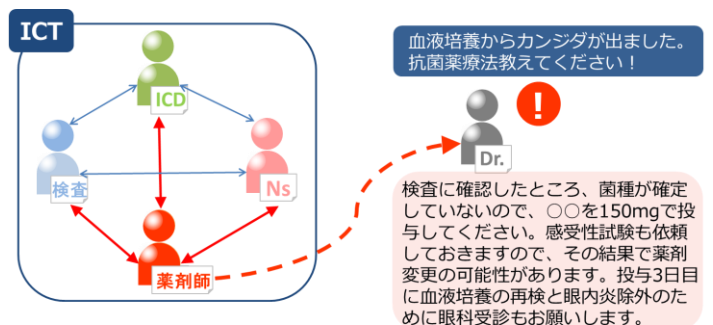
(2) 真菌血流感染治療の適正化

抗菌薬コンサルテーションの成果例として真菌血流感染治療の適正化を挙げる。過去のコンサルテーション未実施症例では適正使用例 (必要投与量・期間、培養検査実施) が少なかったが (2/10 症例)、コンサルテーション開始後の介入症例では大幅に改善された (6/6 症例)。また、真菌性眼内炎症例に対しても必要十分な治療を行い治療し得た。この結果は、コンサルテーションにより確実に抗菌薬療法の適正化が図られていることを示していると考えられる。

4 まとめ

がんセンターICTでは、ICTに寄せられる医師からの抗菌薬に関する相談について、ICT薬剤師が抗菌薬の専門知識を活用すると共に、チーム内の連携により各職種の専門知識を抗菌薬療法提案時の参考とすることで、単なる抗菌薬の提案だけでなく、病態や疾患背景を考慮した抗菌薬の提案、プラスその後のフォローアップまで含めた抗菌薬適正使用コンサルテーションを行うことができています。

しかし、フォローアップの充実や相談されていない症例への積極的な介入等の課題もある。引き続き質の高いコンサルテーション実施による抗菌薬適正使用を推進していきたいと考えている。



チーム内連携強化で各職種の専門知識を利用することにより
充実した抗菌薬コンサルテーションが実施可能に